

『日本語教育』執筆要領

1.使用言語

使用言語は日本語または英語とします。

2.投稿原稿の構成

投稿原稿は、次の部分から構成されるものとします。この順序で書いてください。

- (1) 投稿カテゴリー
- (2) 論文タイトル
- (3) 要旨(和文論文の場合：400 文字以内／英文論文の場合：500 ワード以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。)
- (4) キーワード(原稿中の主要語句を 1 語以上 5 語以内)
- (5) 本文(図表を含む)
- (6) 注(必要に応じて)
- (7) 参考文献・資料一覧

投稿原稿には、執筆者名、所属機関名、および執筆者が推測されるような内容(謝辞、科研費をはじめとする助成金の情報など)は書かないでください。「拙著」「筆者は XXX(1997)において…」等のような表現の使用も避けてください。これらの情報は、査読を経た上で採用が決定した段階で記載していただきます。

3.投稿原稿の書式・分量

投稿の際の提出書類は、学会ホームページからダウンロードした書式を使用して作成してください。

- 投稿原稿は「A4 判横書き、40 字×39 行」で作成してください。原稿は word で作成し、図表を含め、できるだけ仕上がり紙面に近い形で原稿を作成してください。
- 分量は「2.投稿原稿の構成」の(1)～(7)が次の分量に収まるようにしてください。
研究論文・実践報告・調査報告 14 ページ以内（英文の場合、7,000 ワード以内）
研究ノート 7 ページ以内（英文の場合、3,500 ワード以内）
- 『日本語教育』は B5 判です。図表等は縮小率を十分考慮して作成してください。
- 本文（英数字含む）は明朝 10 ポイント、各章の見出しはゴシック 10 ポイント（太字にしない）とし、行間も統一してください。要旨、注、参考文献・資料は文字を 9.5 ポイントとし、それ以上小さくしたり、行間をつめたりしないでください。
- 句読点は、日本語は「,」「。」、英語論文では「,」「.」で統一してください（表題も含みます）。
- 本文にはページ番号を記載してください。
- 各ページの左余白に行番号を記載してください（ソフト上で設定すれば自動的に記載されます）。
- 注は、脚注ではなく後注にし、注の番号は(1), (2), (3)...としてください。
- 図表の文字は、基本的に 8 ポイントにしてください（強調などのため、これより大きいポイントの文字を部分的に使うことは可能）
- 図表の題字はゴシック 9 ポイント（太字にする必要はありません）にしてください。
- 表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に記載してください。

4.参考文献・資料

- 参考文献とは、本文中で引用、言及されている先行研究をいいます。本文中で引用、言及したものはすべて記載してください。一般的に入手が難しい、未公刊の卒業論文や修士論文、科学研究費補助金等による研究報告書などを引用することは、原則としておやめください。資料とは、分析の対象とした一次資料をいいます。これらは、参考文献とは別に記載してください。
- 参考文献と資料の書き方は、以下の基準に従ってください。
 1. 論文原稿の最後に、章番号をつけずに参考文献という見出しをつける。資料を載せる場合は、参考文献の後に、資料という見出しをつける。
 2. 参考文献は、日本語による文献（以下、日本語文献）と、外国語（英語、中国語など）による文献（以下、外国語文献）とを、それぞれまとめて、日本語文献、外国語文献、の順に記載する。
 3. 日本語文献は、第一著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は第一著者の姓のアルファベット順に配列する。各文献の冒頭には、括弧付きの通し番号をつける。
- 各文献で記載すべき情報は、およそ次の通りです。
 1. 単行本<単著、共著>の場合：著者、発行年、書名、出版社名
※外国語文献では、書名はイタリック体にし、出版社名の前に都市名も記入する。
 2. 単行本<分担執筆>の場合：分担執筆者、発行年、当該章の題名、編者、書名、章番号、出版社名、ページ
※外国語文献では、書名はイタリック体にし、出版社名の前に都市名も記入する。
 3. 学術論文の場合：著者、発行年、題名、雑誌名、巻または号、ページ
※外国語文献では、雑誌名はイタリック体にする。
 4. 学会発表予稿集（論文集）の場合：著者、発行年、題名、予稿集名（論文集名）、ページ
 5. 教科書の場合：著者、出版年、教科書名、出版社名
 6. インターネット情報の場合：当該情報が記載されているHPなどのアドレス
※資料にアクセスした日付を括弧付きで記載する。
- 記載例
 1. 単行本<単著、共著>の場合
横山紀子（2008）『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房
レイヴ、ジーン・ウェンガー、エティエンヌ（1993）『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』佐伯胖（訳）、産業図書
Anderson, J. R. (1983) *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
 2. 単行本<分担執筆>の場合
松見法男（2002）「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』第6章、新曜社、pp.97-110.
MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing*. New York: Cambridge University Press. 422-457.
 3. 学術論文の場合
宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち（2009）「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響—文脈の中での意味推測を妨げる要因とは—」『日本語教育』140号、48-58.

- 小柳かおる (2002) 「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号, 62-96.
- Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331-347.
4. 学会発表予稿集 (論文集) の場合
 迫田久美子・松見法男 (2005) 「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究(2) —音読練習との比較調査からわかること—」『2005 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 241-242.
 5. 教科書の場合
 日本花子・東京次郎・大阪美子 (編) (2006) 『上級者のための日本語(2)—読解編—』日本語教育書房
 6. インターネット情報の場合
 『日本語教育』投稿要領 <<http://www.nkg.or.jp/kenkyusha/faq>> (2017年6月2日)
 7. 以上の1~6に登場した文献が参考文献であれば, 下記のように配列して記載する。
 - (1) 宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち (2009) 「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響—文脈の中での意味推測を妨げる要因とは—」『日本語教育』140号, 48-58.
 - (2) 小柳かおる (2002) 「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号, 62-96.
 - (3) 迫田久美子・松見法男 (2005) 「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究(2) —音読練習との比較調査からわかること—」『2005 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 241-242.
 - (4) 『日本語教育』投稿要領 <<http://www.nkg.or.jp/kenkyusha/faq>> (2017年6月2日)
 - (5) 日本花子・東京次郎・大阪美子 (編) (2006) 『上級者のための日本語(2)—読解編—』日本語教育書房
 - (6) 松見法男 (2002) 「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子 (編) 『日本語教育のための心理学』第6章, 新曜社, 97-110.
 - (7) 横山紀子 (2008) 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房
 - (8) レイヴ, ジーン・ウエンガー, エティエンヌ (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』佐伯胖 (訳), 産業図書
 - (9) Anderson, J. R. (1983) *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
 - (10) MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing*. New York: Cambridge University Press. 422-457.
 - (11) Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331-347.

公益社団法人日本語教育学会学会誌委員会 (2017年7月改訂)